

フランス海外圏の極右主義の展開

世界的に人種主義が台頭し、宗教対立も激化しているが、特に西側諸国でその傾向が強く、その背景としての植民地主義の影響が指摘されている。人種主義は植民地主義のイデオロギーであり、宗教対立の主因である移民の多くが旧植民地出身者であるからだ。このことは、現代の問題の解決には歴史的な負の遺産の克服が鍵となることを意味している。これを踏まえて、本研究は、植民地主義の影響が強く残る地域で人々が現代の人種・宗教対立をどのように克服しようとしているのかを探ることを目的とした。

具体的な調査地はフランス領レユニオン島である。レユニオンはその歴史と現状が本研究の課題の解明に最適であろうと考えたからである。マダガスカル島の沖合 800 キロにあるレユニオン島は地理的にはアフリカに属するが、フランス海外県の一つで、行政的には EU 圏に属している。面積は約 2,512 km²と、佐賀県とほぼ同じで、人口は 90 万人程であるが、住民構成は多様であり、多数派であるクレオール(混血)の他に欧州系、インド系、アフリカ系、中国系、マダガスカル系の人々が暮らしている。宗教的にもキリスト教(カトリック)ヒンドゥー教、道教・仏教が共存している。

レユニオンはユーロ圏に属するものの、産業規模は小さい。一人当たりの月額収入の中央値は約 1,320 ユーロでフランス本土の平均より約 27%も低く、約 35%の住民が貧困基準以下にあり、失業率も 19%前後で、いずれも本土の 2 倍以上である。これを見ると経済的な不満は他のフランス海外県と同様に蓄積していると考えられるが、太平洋やカリブ海の海外県とは異なり、独立運動は低調で反政府暴動も 30 年以上発生していない。

レユニオン社会が平穏な理由の一つは、政策理念である共生(vivre ensemble)が社会通年として共有されているからだと考えられている。その基盤は文化のクレオール化にあり、共通の言葉、音楽、食文化が受容されることでレユニオン社会の一員としての意識が強化されるという。本調査でもレユニオンではフランス語にアフリカ・マダガスカル・インドの要素を取り込んだレユニオン・クレオール語が日常語として定着し、南インド料理、広東料理、アフリカ料理をベースにした郷土食が島内全域で食べられており、アフリカ起源のマロヤ音楽が愛聴されていることが確認された。

宗派間の関係も独特の宗教文化が発展してきたとされているが、その一方で、この島では地域によって宗派構成が異なり、東部はヒンドゥー教徒、西部はカトリックと中華系、北部はムスリムが多く暮らしている。

本研究は、こうしたレユニオンの特性に鑑みて、北部、東部、西部にそれぞれ一ヶ月程度滞在し、人種・宗教の共存の鍵である、宗教文化の特質を解明するための聞き取り・観察調査を行なった。(尚、比較のために中継地であるバンコクでもモスク、ヒンドゥー寺院、道観の調査を行った。)

レユニオンの歴史

レユニオンの人種・宗教と共生の特質を探るには、この島の特殊な歴史を理解する必要がある。それぞれのエスニック・グループの成り立ちは歴史と不可分に結びついているからだ。

レユニオン島は 16 世紀にフランス東インド会社の航路の拠点となるまでは無人島であった。18～19 世紀にはサトウキビのプランテーションが主産業となり、そのための労働力としてマダガスカルやアフリカから多くの労働者が奴隷として移住させられた。つまり、この島の歴史は奴隷制の歴史であり、欧州系の農場主、アフリカ系の奴隷という人種と階級が結びついた社会の骨組みが作られ、そ

れが奴隷制廃止後も残ることになった。

こうした特徴は近代の定住型植民地主義に共通するものであるが、レユニオンでは他では見られない変化も起こった。この島には貧しい欧州系の商工業者も多く、アフリカ系の人々との通婚が進んだからだ。彼らの子孫は「有色の自由人 *libres de couleur*」として島の間層を形成し、レユニオン独自のクレオール化を牽引した。

奴隷制は1848年に廃止されたが、サトウキビ栽培を維持するため、1860年代に南インドから大量の人々が年季奉公人として移住した。労働環境は奴隷制時代と同様に過酷だったが、人々は島に定住し、最大のエスニック・グループを形成することになった。彼らの多くがタミル系であり、その文化と信仰(ヒンドゥー教)が根付くことになった。

第三の移住の波は、19世紀末から20世紀初頭に訪れた。まず、交易に従事する目的で北インド出身のイスラム系の人々が移住し、都市部の商人階級を形成した。次いで1920年代には中国・華僑系の人々が移住し、内陸や農村部での小売業に進出した。

こうした歴史によって複数のエスニック・グループが出来上がった。奴隷として連れて来られたアフリカ系・マダガスカル系の人々は、宗教的にはカトリック化した。人種的に差別され、カーフと呼ばれる集団を、南インド系の人々はヒンドゥー教の信仰やタミル文化を保持したマルバルと呼ばれる集団を、北インド系の人々はイスラム文化を維持したザラブと呼ばれる集団を作り、中国系の人々も仏教・道教・祖先崇拜で結びついた独自の文化を伝えた。

レユニオン島はフランス植民地帝国におけるインド洋地域の重要性が低下するのと連動して1860年代から1970年代まで長らく経済的に低迷した。この間も島の人口は増え続けたため、島民は3～4世代にわたって失業と貧困に苦しめられたが、この間にレユニオン独自のアイデンティティが作られることになった。

クレオール化

現在でも日常的にカーフ、マルバル、ザラブといった集団名称を耳にするように、古い集団意識は残っていると推定できるが、エスニック・グループの境界線は非常に曖昧になっている。数世代にわたる通婚によって多くの人が複数のルーツを持つようになったため、外見上の「人種的特徴」による区分は意味がないし、食文化に典型的に見られるように、昔は特定の民族固有の文化であったものが島の人々の共通の文化として受容されているし、奴隷や貧民の住居であったカーズと呼ばれるトタン葺きの平屋家屋は島の標準的な建築様式となっている。

こうした共通文化の中で最も重要であると考えられるのがレユニオン・クレオール語だ。クレオール語は異なる言葉を話す人々が奴隷として植民地に集められたことで生まれた。農場主は奴隷に教育を与えなかったため、奴隷たちはコミュニケーションの手段として独自の言葉を作り出したのだが、レユニオンでは20世紀前半まで高等教育が富裕層の特権であったため、フランス語は支配階級の言語であり、クレオール語は奴隷・労働者の言語という状態が長く続いた。しかし、この常識は変わりつつある。第二次世界大戦後の公教育の拡充によりフランス語話者は増加したが、クレオール語が駆逐されることはなく、人種・民族・階層を超えて島民たちに広く使われ続けているのだ。現在では標準的な表記法が考案され、日常会話だけでなく、書き言葉としても用いられるようになっている。本調査でも、クレオール語の汎用性が高く、島の全域で日常的に使われているだけでなく、企業や地方政府の広告や看板、ローカル放送の媒体などとしても広く用いられていることが確認された。2026年

3月には地方選が行われたが、多くの候補者がフランス語ではなくクレオール語による選挙公報を発行していた。こうした現象は、クレオール語を積極的に活用する動きの一環であると見るができる。つまり、かつては社会階層を分ける指標だったクレオール語がレユニオン固有の文化として積極的に評価されていると考えられる。クレオール語は、行政・教育・専門職として移住してきたフランス本土出身者との差異化のためにも機能しており、本土出身者を指す俗語であるゾレイユとは、クレオール語が聞き取れないために耳を寄せる仕草をすること由来している。

宗教とエスニック・アイデンティティ

レユニオンには四つの宗教が信仰されているが、歴史的に宗教はエスニシティと結びついてきた。レユニオンの宗教文化の特質を理解するために、まず全般的な宗教組織の概要を確認してみよう。

レユニオンではカトリック教会の影響が強く、島民の86%が信者であるとされる。カトリックは植民主義を支えるイデオロギーであり、農場主たちは奴隷を強制的に改宗させ、定期的に礼拝をさせることで、従順な召使として飼育慣らそうとした。奴隷制廃止後もカトリック教会の力は大きく、インド系や中国系の移民の多くがカトリックに改宗した。現在でもカトリック教会は大きな影響力を持ち、司祭による巡回ミサには多数の信者が参加し、教会は重要な社交場として機能している。

カトリックに次いで影響力が大きいのがヒンドゥー教である。沿岸部の都市には例外なくヒンドゥー寺院が存在し、その多くが神々や動物を模った彫像を備え、色鮮やかに塗られた大型寺院である。こうした寺院には定期的に信者が訪れ、毎年行われる祝祭には数千人規模の参列者が集まる。フランスでは宗教別の統計はとられていないが、島民の10~20%がヒンドゥー教徒であると見られている。レユニオンでは、年間を通じて多くのヒンドゥー教の行事が行われているが、代表的なものは、年末から年始にかけて行われ、女神ドラウパディに祈願する火渡りの儀式(ディミティ、信者が焼けた炭の上を裸足で歩く儀式が有名)、ムルガン神に捧げるタイプーサム・カヴァディ(1月~2月・写真資料③)、タミル暦の新年にその年の運勢を占うプータンドゥ(4月中旬)ガネーシャ神に奉仕するヴィナーヤカ・チャトゥルティ(8月~9月)である。これらの儀式は寺院の外にまで山車や行列が繰り出し、大々的に行われる。

第三の宗教勢力はイスラム教である。イスラム教徒は沿岸の都市部に集中して暮らしており、特に商業地区と結びついている(写真資料④)。島の最大都市のサンドニは最大のムスリム集住地であり、市の中心にあるアル・ヌール・モスクは1898年創建で、これはアルジェリアを除くとフランスの行政下で作られた最初のモスクである。歴史的な交易拠点であったサンポールにも創建100年を超えるモスクがあり、これも商業地区の真ん中に作られている。南部最大の都市であるサンピエールもムスリムの拠点で近代的な意匠のモスクが商業地区の中心に作られている。モスクの中にはムスリム・コミュニティが運営する宗教学校もあり、児童たちにコーランを教えている。島民に占めるムスリムの割合は5~10%(4~9万人)とされ、その大半はインドのグジャラート地方に起源を持つ人々であるが、近年ではコモロ諸島出身のムスリム移民も増えている。

レユニオンの中国系コミュニティは人口2万~3万人前後であるが、小売業・飲食業で成功した者が多く、ムスリムと同じく、都市部・商業地域に集中して暮らしている。中国系の人々は文化的には民族的特質を失っており、フランス語・クレオール語が主流で中国語を解するものは少ない。彼らの精神的中心となっているのは独自の宗教施設である。これらは一般には「道観」と呼ばれているが、内部には関帝廟、天后廟と並んで孔子廟と観音堂が設けられており、道教・儒教・仏教・民間信仰が

融合した寺廟である。その信仰の実態も現世利益的であり、仏教起源の観音信仰すらも家内安全と健康増進を願うものと考えられている。中国系の人々にとって信仰とは、文化的アイデンティティを確認する手段であり、太陰暦の新年を祝う春節(写真資料⑥)、旧暦七月に行われる中元節、そして閏帝誕祭では中国本土から芸人を招いた大規模な祝祭が行われる。

レユニオンの宗教文化の特質としてのシンクレティズム

レユニオンでは宗教がエスニック・アイデンティティと密接に結びついているため、宗教性を強調することは *vivre ensemble* の理念を脅かすと考えられるが、少なくとも現時点ではそうした兆候は見られない。本研究でもヒンドゥー教の行事であるカヴァディには山車が繰り出す沿道に多数の見物客が集まり、その中にはカトリック教徒やムスリムが多数含まれていることが確認できた。中国系の祝祭である春節が地域のイベントとして定着し、中国系以外の人々も多く参加していることも確認された。

民族性と共存という二つの理念はなぜ両立可能なのだろうか。本研究では、その鍵となるのがレユニオン独自の宗教文化であることが確認された。

レユニオンのカトリック教徒は 86%、ヒンドゥー教徒が 10~20%、ムスリムが 5~10%とされているが、これらの数字を合わせると 100%を超えてしまう。この矛盾は、多くの人々が複数の信仰を同時に実践しているために生まれたものである。教会でミサに参加する同時にヒンドゥー教の儀礼にも参加したり、道観での祖先供養や儀礼に参加したりすることは広く知られている。こうした現象はシンクレティズムの一種と見ることができる。

シンクレティズムとは異なる宗教的要素が融合した信仰形態のことで、日本における神仏習合もその一種である。神仏習合が日本古来の自然・祖先崇拝を仏が顕現したものと解釈して仏教的に受容可能としたように、レユニオンの場合も他宗教の要素を帯びた信仰にカトリック的外見を施すことで公式宗教と両立可能なものとなっている。

元来は支配者の宗教であったカトリックは、奴隷や年季奉公人に受容される過程で作り替えられ、新たな信仰に変化した。それを示す代表的な遺跡がサンジル・レオーにある尖塔礼拝堂 *Chapelle Pointue* の外部空間である。この礼拝堂は大農園主の場所として 19 世紀初頭に建立されたが、奴隷や奉公人の布教施設として活用された。奴隷たちは礼拝を強要されたが、同時に礼拝堂の周りでアフリカ・マダガスカル起源の祖先崇拝・精霊信仰を密かに続け、カトリックの聖人である聖ラファエル像を祀った小祠を信仰対象とした(写真資料⑤左がラファエル像)。現在でもこの信仰は生き続けており、今回の調査でも供え物や絵馬風の祈願飾りが置かれていることが確認された。尖塔礼拝堂の例は、多様な出自(アフリカ、マダガスカル、インド、アジア)をもつ奴隷・労働者が、それぞれの宗教観や儀礼を持ち込んで融合した自然発生的信仰だと考えられている。

公式カトリックの空間と非公式信仰空間が並存することで、新たな宗教文化が生まれるもう一つの代表的な例が、サントマリーにある黒い聖母像の信仰である(写真資料①)。黒い聖母信仰とは、ザビエル教会の裏手の墓地を望む岩の窪みに安置された黒い聖母マリア像に祈りを捧げると願いが叶うというものである。聖母像が願いを叶えると信じられたのは次のような伝説に由来する。ある時、追っ手に発見された逃亡奴隷のマリオは聖母像が置かれた岩場まで逃げてきたが、取り囲まれてしまった。マリオが聖母に庇護を祈ったところ、突然ブーゲンビリアの藪がマリオを包み込み、追っ手を阻んだため助かることができた。それ以来、黒い聖母像は虐げられたものたちの願いを叶えてくれるように

なった。

現在でもレユニオンの人々は聖母の庇護を信じ、病氣平癒、出産安全、航海安全などに関する祈願を行なっている。黒い聖母信仰には日本のお礼参りによく似た習慣もあり、願いが成就した折にはお礼の供物を捧げねばならないと考えられている。本研究の調査でも聖母像には絶えず多数の参拝者が祈りを捧げ、その周りには無数の花束や供物、中には不要になった松葉杖までも「奉納」されているのが確認できた。

黒い聖母信仰は、東南アジアからアフリカまで、植民地主義によってカトリック布教が行われた地域に広く見られるもので、レユニオンのケースもアフリカ・マダガスカル系の精霊信仰と関係がありそうだが、供物の中にマリーゴールドの花輪をよく見かけるようにヒンドゥー教的な要素も散見される。マリーゴールドの花輪はヒンドゥー教の寺院の代表的なお供物である。

レユニオンの黒い聖母信仰自体もそれほど古いものではない。というのも、黒い聖母像はザビエル教会がマルセイユの業者に制作させ、1856年に納品されたものだからだ。この際、教会は輸送中の事故を考慮して2体注文し、二つとも無事到着したので、一体は教会前広場に、もう一体は墓地の裏の岩の窪みに安置したのだった。2体は鋳鉄製でもともと灰色だったので経年劣化によって黒ずんでいったが、教会前の像は白く塗られたのに対して、墓地の像は劣化。黒色化し、いつしか黒い聖母として信仰されるようになり、ザビエル教会とは無関係の宗教施設として発展していった。聖像は奴隷制廃止後に設置されたのであり、マリオの伝説もその後には作られたことになる。

黒い聖母が黒い肌の人々の守護者として受容されたという仮説にも一考の余地がある。黒い女神とはヒンドゥー教におけるカーリー神にも当てはまるからだ。カーリー神は破壊と再生を司る女神であり、世界の秩序を守る存在とされているが、その姿は黒い肌をしたものとして描かれる。カーリーは慈悲深い母でもあり信者にとっては守護者でもあるから、サントマリーの黒い聖母像信仰はカーリー神信仰との習合と見ることが可能である。ここからレユニオン島の「クレオールのカトリック」文化が誕生する上でヒンドゥー教が重要だったことが分かる。

ヒンドゥー教の役割を裏付けるもう一つの例はサンテクスぺディ信仰である。サンテクスぺディは4世紀にアルメニアで殉教した聖人だが他のカトリック圏では殆ど知られていないが、Expédit(迅速な)という名前からの連想で、レユニオンでは速やかに願いを叶える守護者と信じられ、特に金銭、仕事、恋愛、試験などの願いに対応するとされている。そのため、宗教儀礼よりも実用的・願掛けの対象として尊崇され、島内の至る所に聖人を祀った祠が設けられている(写真資料⑤右側がサンテクスぺディを祀った祠)。標準的な礼拝方法は、聖人像に小さな供物やロウソクを捧げ、願いを唱え、それが叶うと感謝の供物を備えるというものである。

サンテクスぺディ信仰は個人的な現世利益を期待するという点で黒い聖母信仰と共通点が多いが、カーリー神信仰との接点も多い。レユニオンのサンテクスぺディ像は片足を踏み出した若い男性の立像で、通常は赤い衣装を纏っている。赤はサンテクスぺディの最も重要な属性であり、そのため殆どの祠は真っ赤に塗られ、しばしば赤い布が結び付けられている。これはカーリー神を祀る祠とも共通しており、赤はカーリー神のシンボルでもある。カーリー神(カーリー)信仰で赤色が好まれる理由は、カーリーは戦いの女神なので血を象徴すると同時に、再生を司る女神でもあるので生命エネルギーの象徴でもあるからだ。

死と再生というカーリー神のモチーフはレユニオンのサンテクスぺディ信仰の本質をなしている。サンテクスぺディ信仰の起源は20世紀初頭であり、それ以降、聖人を祀る祠は島の各地に作られ増

え続けている。祠が増殖し続けるのは自動車が普及したからである。聖人を祀る祠の殆どが見通しの悪い交差点や山間のカーブにあるように、祠は死亡事故があった場所につくられ、死者の冥福を祈ると共に同じ悲劇が繰り返されないことを祈願しているのだ。死者が生者の願いを叶えるという構図は祖霊・精霊信仰とも共通点があり、その意味でサンテクスペディ信仰はカトリック、ヒンディー、アフロ・マダガスカル系の信仰の融合したレユニオン のクレオール化された宗教文化を代表するものだといえる。

研究成果と今後の教育への効果

レユニオンの文化融合を調査することによって、宗教が共存するには異質な要素を許容する柔軟な寛容性が不可欠であることが確認できた。祖霊信仰、黒い聖母、サンテクスペディ信仰はいずれも公式のカトリックの教義から逸脱したものであるが、カトリック教会は厳格な教義に固執せずにそれを黙認することで、異教の伝統をもつ人々をカトリックに取り込むことができたのである。同じような柔軟性は、ヒンドゥー教にも当てはまる。黒い聖母やサンテクスペディ信仰をカーリー神崇拜の一種と解釈することでタミルの文化とカトリック信仰の両立が可能となったと考えられるからだ。レユニオンの他のヒンドゥー教の行事も同様の性格を持つ。ディミティやカヴァディは、サトウキビ農園のインド人労働者が事故を防ぐためのお祓いとして始まったもので、それを農園主が容認したことから島の伝統として定着したのであった。これはヒンドゥー教とカトリックは同じ宗教的次元で競合するのではなく、前者はタミル人の文化的属性と解釈され、魂の救済という高次の次元はカトリックが担うという役割分担であったとも言える。同じことは中国系の人々とカトリック教会の関係にも当て嵌めることができる。お祓いやお札などの道教的シンボルは商店のディスプレイの一部と解され、中国系の人々の文化的属性として理解されている。

レユニオンのクレオール文化の研究によって、差異を受容する柔軟性は、宗教対立だけでなく人種主義を克服する鍵でもあることも確認された。レユニオンでは肌の色によって差別を受けることは殆どなく、東洋系である筆者も三ヶ月の調査期間中に一度も差別的な扱いを受けたり、誹謗されたりすることはなかった。これはヨーロッパとは全く異なる経験であった。

異質な要素を包含したクレオール性が豊かさの源泉であることが認識されれば、人種主義者が主張する均質性や純粋性が不毛なものであることがはっきりする。今後は、この知見を活かして、人種主義、宗教対立、紛争のメカニズムを異質な「文明の衝突」として説明するのではなく、寛容性の欠如と捉え、対立は相互承認によって解決できることを学生たちに伝えてゆきたい。

写真資料

<p>① 黒い聖母像</p>	<p>② クレオール語の広告</p>	<p>③ カヴァデー</p>
		
<p>④ サンプノワのモスク</p>	<p>⑤ 尖塔聖堂の祠</p>	<p>⑥ サンピエールの春節会場</p>
		